

## 四国の三津ヶ濱

## 探索記——国木田独歩——

神野 幸人

(会員 鎌倉市台)

独歩の忘れえぬ人々の一人に四国の三津ヶ濱の琵琶僧があり、この港や濱や町、特に朝の魚市場の風景を詳しく記してあるので探索することにした。(明治二十六年九月二十九日記には午後佐伯行きの汽船に乗るとあり、明治二十七年八月三日記には、午前十一時三津ヶ濱を出発とあり、更に忘れえぬ記には、夏の初めと記憶しているが、汽船の来るのは午後と聞いたので此港の濱や町を散歩したとある)

《豊後の国佐伯》と《若き日の国木田独歩》の独歩佐伯生活譜に「忘れえぬ人々」の琵琶僧に遇つたのは、明治二十六年九月二十九日も知れぬ？明治二十七年八月

三日かも知れぬ？とあるので、どちらであったかを確かめるため。

独歩が佐伯を去つて三津ヶ濱に着いた八月三日にあわせて三津ヶ濱を訪ねた。八時四十五分、空港より漁港と魚市場を訪ねた。魚市場は新市場として一般人の出入禁止として入場出来ず、活気の程不明。旧市場が現存しているとして車を廻す。途中でフェリー乗船場あり。

以前広島方面に船が出ていたそうだが、今は近くの島回りの小さなフェリー港となっていた。旧市場はその先にある。朝というのに、魚影もなく人影もまばらで、数人の女性が何か加工していた。独歩が『この港の繁盛は格別で、わけても朝は魚市が立つので、魚市場の近傍の雑踏は非常なものであった。……売るもの買ふもの、老若男女、何れも忙しさに面白さうに嬉しさに、駆けたり追つたりしている……』



三津浜港

の情景は偲ぶべくもなかった。

『ぶらぶら歩き、やや物静なる街の一端に出た。すると直ぐ僕の耳

に入ったのは琵琶の音であつた。其処の店先に一人の琵琶僧が立つていた。……僕はちつ

と此琵琶僧を眺め其琵琶の音に耳を傾けた。この道幅の狭い軒端の揃は

ない。而も忙しきうな港の光景が此琵琶僧と琵琶の音とに調和しない様で而も何処かに深い約束があるやうに感じられた』

そんな路地が現存していた。明治時代の建物では無いだろうが、戦災を免れた昭和初期の軒の低い建物の家並



渡しの船

み、道幅は明治時代と同じであろう。上半身裸で縁台で新聞を見ている老人、太刀魚や雑魚を乗せたりヤカーに行商の準備をする老婆、車の音が全然しない。タイムトンネルの空間がここにあった。

琵琶僧がいまにでも出てきそうな、三津浜の路地にしばし佇む。忘れえぬ一時。

独歩は当日の天候を『大空は名残なく晴れて朝日麗らかに輝き』と記してある。小生が行つた八月三日は朝とはいえ、九時頃であつたので『朝早く旅館を出た』独歩と状況が違うかも知れないが、片雲もない快晴で、気温は三十度をこえていた。

五三〇年前のまま今もある『洲崎の渡し』の対岸の森の蝉の大合唱が天を破つて旧市場にも響いていた。独歩はこれを記していないので。

『夏の初の記憶』が記憶間違いであれば、往路の午後の便で佐伯に行った明治二十六年九月二十九日の日記とつじつまが合



うのだが、『午後の便と聞た』が間違いであれば、明治二十七年八月三日午前十一時、三津浜を出発した復路とつじつまが合う。

兩日の天気を松山地方気象台に問い合わせたところ  
松山の午前七時、(三津浜に測候所なし)

・明治二十六年(一八九三)九月二十九日

天気 曇・気温 二十一・九度

・明治二十七年(一八九四)八月三日

天気 快晴・気温 二十六・二度

(平成十三年八月三日・金・晴)

## ◆『佐伯四国札所めぐり』

—その二・平成十四年度—



編集・佐伯史談会  
平成十五年刊 B5判 三〇頁

本書は十四年発行の『佐伯四国札所めぐり』に続く、二度目の発行です。史談会の霊場めぐりは年間四回実施しています。一回目は本匠村の三股・宇津々・波寄・小川・小半(二月八日)、二回目は本匠村の日平・中上津川・井ノ内・直川村の井取・杭の内・袖ノ原・上ノ地・黒沢(五月十七日)、三回目は直川村の長野・堂師・竹ノ下・間庭・波寄・岩井戸(九月二十日)、四回目は弥生町の久保・間田・細田・平井・小田(十一月二十二日)の各地の霊場を訪ねている。

本書の構成をみると、各霊場の名称・所在地・開山の時期・仏像・建造物と建築年代、境内遺物・札所詠歌について詳細に解説している。

また、各霊場をカラー写真(三八枚)で紹介、親しみやすく、心の安らぎを覚える冊子となっている。本書は佐伯地方の四国札所めぐりの際の必携書。会員・一般の方々に一読をお勧めしたい。

・会員頒価 一〇〇〇円

・申し込み先 事務局 TEL 二二一七二二三

河野信夫まで (矢野)